

トニ・モリスン『タール・ベイビー』の
主題をめぐって

太田 まり子

トニ・モリスン『タール・ベイビー』の 主題をめぐって

太田 まり子

はじめに

『タール・ベイビー』(1981年)は、トニ・モリスン(1931～)の第4作目の小説である。

この小説の主舞台は、カリブ海の小島「騎士の島」で、ここに白人の富豪ヴァレリアン・ストリートの壮麗な屋敷「十字架館」がある。ヴァレリアンは妻マーガレットとともにこの屋敷に住み、黒人の執事シドニーとその妻オンディーンが二人の世話をしている。1979年ころの12月、この屋敷にはシドニーの姪ジャディーンが逗留している。美しい娘ジャディーンは屋敷に侵入した黒人の青年サンと恋に落ちるが、黒人でありながら白人の文化のもとで生きるジャディーンと、民族の誇りと歴史を胸にきざんで生きるサンは決裂する。『タール・ベイビー』は、一般には文化的背景の違う若い男女の恋愛と葛藤を描いた小説であり、ジャディーンの学資を援助しているヴァレリアンは、彼女の背景としての役割を演じていると言われている。^(註1)しかしそうであるなら、ストリート夫妻をめぐる物語が分量的に最も大きなスペースを占めているのはなぜだろう。私はこの白人夫婦の物語が、若い黒人男女の物語に劣らず、この小説の重要なテーマを形づくるものと考ええる。

ではまずこの白人夫婦の物語を見ていこう。

(1) ストリート夫妻の物語

この夫婦の過去は、それぞれの回想として詳しく語られている。

ヴァレリアンはフィラデルフィアのキャンディー製造会社を経営する一族のたったひとりの男の子として生まれ、周囲の大きな期待の中で育った。

7歳の時父が亡くなり、彼は大きな喪失感を持つ。彼は最初の結婚に失敗し、39歳の時たまたま出くわしたパレードの中にミス・メイン州の美しい娘（17歳のマーガレット）を発見し、その美しさに感動し結婚した。彼は伯父たちが年をとり会社の邪魔物になってからも会社にしがみつく姿を見、自分はそうはなるまいと決意する。彼は自分は会社の経営者であると同時に、音楽と書物に親しむ、欲のない善良な人間だと思ってきた。息子マイケルが生まれ、彼は他の何よりも息子を大切な存在だと思う。息子が会社を継いでくれることを念願するが、息子は彼の期待するような人間にはならなかった。彼は息子をだめにしたのは妻だと思っている。マイケルが小さかったころ、マーガレットはしばらく息子をせっせと世話し、次には放り出すということを繰り返した。マイケルは放っておかれると寂しがり、やさしくされると母の奴隷のようになった。マイケルが小さかったある日、ヴァレリアンが仕事から帰るとマイケルが洗面台の下にもぐって、ひとりでも寂しそうに歌を歌っていた。そしてやわらかいものが欲しいと言った。そんなことが何回かあった。マイケルが寄宿学校に入ってから、マーガレットは息子が帰ってくる度に息子の注意を引きつけようと作り話をしたりした。ヴァレリアンは妻が隠れて酒を飲んでいるとずっと思っている。アル中だから子どもに対して妙にべたべたしたり、情緒不安定であったりすると理解している。そんな妻に育てられた息子はいつまでも精神的に子どものままだと彼は思う。現在は詩人で社会主義者だというマイケルは、インディアンの保留地で働いていたこともあり、環境保護関係の弁護士になりたいと言っている。そんな息子についてヴァレリアンは言う。

「マーガレットのせいだ。あれは詩は財産とは相容れないと彼が考えるように仕向けた。この国でももっとも美しく聡明な少年の一人を永遠の敗残者にしてしまった」^(註2)

ヴァレリアンは息子が永遠に自分とは折り合わないだろうと確信するに至った時大いに失望し、会社を大手の製菓会社に売り払い、人生そのものから引退するつもりで、ドミニカ島の近くの小島「騎士の島」に隠居した。彼が68歳の時である。社長在任中に彼はこの島を購入し「十字架館」と呼ばれる壮麗な避寒の別荘を建てさせていた。移住の理由は仕事からも町からもすっかり隠遁したかったからだが、息子に執着する妻から息子を守り

たい、息子から妻を遠ざけたいという思いが彼の心の奥にあった。

一方、ヴァレリアンの妻マーガレットは、子どものころからたくいまれな美貌の持ち主だった。両親は彼女の面倒を最低限見たが放ったらかしにし、自分たちの知識や力を、美しくない他の子どもに注いだ。貧しい家庭にあって両親のエネルギーは、おおかた生きるために使われた。マーガレットの子ども時代は家族の中で孤独だった。また、美しいことがわざわざいして、小さい頃から人間関係に気を使って生きてきた。しかし孤独に過ごしたとはいえ、子どもの頃に住んだ貧弱なトレーラーの家はマーガレットには何にもまして恋しい思い出の場所だ。「美しいだけで充分」と言って求婚したヴァレリアンと、高校を出て8カ月後に結婚した。料理の仕方也不知道うちに、調理人つきの豪邸に、彼女が通った小学校よりも大きな屋敷に迎えられた。慣れない大きな家に彼女は脅迫観念をいだく。どーんという音がどこからともなく聞こえるようになる。使用人の扱ひ方も知らない。やがて当時20代の調理人オンディーンと親しくなり、台所でおしゃべりを楽しむようになるが、夫から使用人と親しくするのは止めるように命じられる。じきに子どもが生まれるが、その後もどーんと屋敷に響く音は消えず、ますます大きくなった。その音はやがて聞こえなくなったが、今度は不自由なこの島の暮らしが始まった。

このように白人夫婦の過去は、それぞれに子ども時代を含めて詳しく描かれている。モリソンの小説に共通する大きな特色は、主要な人物の子どもの頃の体験が描かれ、小説の現在におけるその人物の行動が過去に深く規定されるものとして語られる点である。特に親にどのように育てられたかが重要なポイントとなっている。この点を考慮すると、『タール・ベイビー』において、親との関係を含め子ども時代が描かれているこの夫婦は、主要人物の単なる背景にすぎないのではなく、彼ら自身が主要人物だと考えられる。その二人の過去は現在に大きな影を投げかけ、この夫婦の物語が小説の流れを作っていく。

では、この夫婦の現在はどのように描かれているのか。その物語を見ていこう。

「騎士の島」に移って来てから3年がたち、1979年ころのクリスマスが近づいている。ヴァレリアンとマーガレット(48歳)の島での生活は、シドニー(70歳近い)とその妻オンディーン(50歳代前半)の労働に深く依拠している。しかし白人夫婦の食事の所望は、調理人のオンディーンに聞

き入れられていない。それどころかマーガレットは、オンディーンが自分を混乱させるために故意に食べにくいものを出すと感じている。マーガレットは上流階級の婦人にふさわしく化粧や髪の手入れを怠らないが、最近物忘れがひどく、たとえば口紅をひねって筒から出したあとで、それが何のためのものか、舐めるためのものか、字を書くためのものか分からなくなる。とりわけ食事中にそのような症状が出て、食器の使い方や物や人の名前の言い違いを夫に毎度厳しくとがめられる。妻のそんなぎこちなさや朝起きられない理由を、ヴァレリアンは飲酒癖の結果と考え、苦々しく思っている。執事のシドニーに妻の元へ酒を運んでいるかと問うが、シドニーは否定する。マーガレットは夫と寝室をともししていない。彼女は不眠症気味で夜なかなか眠れない。肌をあらず熱帯の灼熱の気候、友人もいない、理解できるテレビの番組もない島の生活は、すべて夫の気まぐれな決断から起きたことで、我慢も限界だとマーガレットは感じている。

このように、白人夫婦の日常はお互いへの不信感で満ちている。また、読者にはマーガレットは本当にアル中なのだろうか、オンディーンは白人夫婦に逆らっているのだろうかという疑問が起こる。さざ波のような不協和音の中で夫婦の現在の物語は始まる。

島の暮らしではすべての物を海の向こうから取り寄せなくてはならない。ヴァレリアンの「うおのめ」の薬もなかなか届かない。そんな不自由な生活でヴァレリアンの唯一の安らぎは、クーラーを効かせた温室で北国の植物を育て、そこでクラシック音楽を聴くことだ。マーガレットの楽しみは、合衆国にいる息子マイケル(29歳)をときどき訪問することだ。彼女は息子のことを、聡明で心やさしく自己犠牲的な、誰にでも好かれる人間だと思っている。彼女はこの息子を今回のクリスマスに是非呼ぼうと考えている。その計画が「十字架館」の日常に大きな波紋を起こすことになる。

マーガレットの強い希望にもかかわらず、マイケルは夫婦が島で暮らし始めてから一度も訪れていない。今回こそ来てもらおうと、マーガレットは息子の尊敬する人物を招待し、それを餌に息子を釣ろうと思いついた。そしてクリスマスが終わったら、息子とともに合衆国に帰り、息子のそばに住もうと考えている。それを聞いたヴァレリアンは怒る。そうになったら悪夢の再来だ。マーガレットは息子を迎えるクリスマスには、アップルパイと七面鳥の伝統的な晩餐が必要だと考える。このクリスマスのメニューの注文をシドニーから伝え聞いたオンディーンは激怒する。この島ではフ

ランス以外からの農産物の搬入は禁止されていて、リンゴなどは最も手に入りにくい物なのだ。それを知っていてアップルパイを作れとは。マイケルを誘き寄せようとする手段にしてもあんまりだ。怒ったオンディーンはマーガレットのことを、母親の資格がないとか、あばずれとか言って非難する。シドニーは妻の言い方がひどすぎると思う。シドニーはヴァレリアンの方こそわがままで自分勝手な人間だと感じている。使用人夫婦の白人夫婦に対する反発には非常に強いものがある。二人は人生の大半をこの家族のために働いてきた。オンディーンは、30年間休日もなく働きづめだったため、ひどく痛む。シドニーはヴァレリアンが子どもの頃から仕えてきた。しかしこの使用人夫婦には、貯えも自分たちの家もない。わずかな貯えを二人は姪ジャディーン(25歳)のために使った。姪が孤児になって以後、生活費を送ってきたのだ。(学費はヴァレリアンが出している。)ジャディーンはやや肌の色の薄い黒人で、子どものいないシドニーとオンディーンは、この美しい姪を娘のように思っている。

「十字架館」に近くの間から通ってくる黒人たちがいる。雑役夫(ヤードマン)と呼ばれている老人ギデオと、メアリーと呼ばれている洗濯女レーズ(弱視の老婆)で、二人はシドニーたちの仕事を補佐している。

クリスマスの数日前、夕食の食卓でヴァレリアンとマーガレットはマイケルのことで言い争いになり、お互いを馬鹿者呼ばわりし、同席のジャディーンをはらはらさせる。泣いて部屋に引っ込んだマーガレットは、忍び込んでいた黒人の男を見つける。恐怖におののき叫ぶマーガレットを尻目に、ヴァレリアンはその男サン(30歳前後)をテーブルに誘う。ヴァレリアンはふと息子が現れたような気がしたのだ。マーガレットは夫の態度に心底から屈辱を感じる。妻の寝室にいた黒人の男を警察に引き渡すでもなく、家にいさせておくとは。マイケルのそばに住みたいと言った自分を懲らしめるための嫌がらせだと感じる。もう我慢できない、マイケルが来たらここを去ろうと決意する。シドニーとオンディーンも主人の気まぐれな行動に驚愕する。二人にしてみれば、屋敷に潜んでいた黒人というだけで、サンは十分に危険人物だ。しかも彼らは食糧が最近盗まれていることに気づいていた。主人の命令に従い、シドニーは極度に汚らしい黒人の「浮浪者」に給仕し、客用の寝室に案内するが、内心は煮えくり返っている。彼は屋敷の者を守るため、銃を持って一晩中サンを見張る。シドニーの怒りはオンディーンもはじめて見るほどのものだった。

このように物語はサンが登場でさらに波紋が広がり、白人夫婦間の対立も、執事夫妻と白人夫婦の対立も一段と激しくなる。

クリスマスがいよいよ近づき、マーガレットはマイケルが来るという期待で躁状態で、料理を自分で作ると言い出す。ヴァレリアンはサンが長いこと咲かなかった温室の花を咲かせたので上機嫌だ。シドニーもサンが礼儀正しく詫びたので鉾を収めた形だ。館は静かな和らぎに包まれる。しかしこの平和は長続きしない。マーガレットは台所で料理にとりくむが、うまくできるはずもなく、オンディーンの仕事を増やすだけだ。それに加えて雑役夫と洗濯女がなぜか来ず、仕事がたまり、オンディーンのいらいらはつる。期待と大わらわの準備となかなか来ない息子と客への連絡で、クリスマスイヴの夜はふけ、クリスマスの当日が明ける。

結局、マイケルも他の客も来ないことが分かり、マーガレットは失望する。ヴァレリアンの提案で、使用人も含め、「十字架館」にいる者でクリスマスの食事をすることになる。晚餐の席でサンは「ギデオンが来られなかったのは残念だったなあ」と言うが、誰もそれが雑役夫の名前だとは知らない。サンはヴァレリアンに言われて散髪のためにギデオンたちの家を訪れ、一泊していた。サン以外は誰もこれまで雑役夫の名前に注意を払ったことがなかったのだ。雑役夫のことが話題に出たので、ヴァレリアンは雑役夫とメアリー（テレーズ）を誅にしたことを皆に告げる。この二人はアメリカの領事館のある島からリングを運ぶ役目を命じられたが、そのさいリングを数個盗んだからだ。これを聞いてシドニーとオンディーンは自分たちに知らせもしないで、と怒る。二人にとって雑役夫たちはなくてはならない存在だからである。シドニーはもう一人の盗人サンが客室に招かれたのに他の二人が誅になるのはおかしいと不平を言う。オンディーンは、

「いわせてもらいますよ。この人はわたしの台所でおせっかいを焼いて、ふざけてパイなんかつくって。なのに、わたしの助っ人は誅になる！」^(E3)

と言い、ヴァレリアンはこの発言に怒り、「おまえは誅だ」と叫ぶ。興奮したオンディーンはマーガレットを母親の資格がないとののしり、平手で打ち、とっくみあいの喧嘩となる。二人は「白人の怪物！ 赤んぼう殺し！」「黙れ！ くろんぼ！」とののしり合い、オンディーンはマーガレッ

トの過去を暴露する。マイケルが赤んぼうのとき、尻に針を刺したり、煙草で火傷させたりしていたというのだ。一同はショックを受け、晩餐は悪夢のような情景へと変わる。

オンディーンは、

「[あの子は] いつも慄えてましたよ。[あの子は] このひとがそういうことをやめてくれるのを願ってた。(中略) そしていつもしばらくは止めるんだけど、また、ほんやりした目付きになって、あの子はからだを曲げて横になっていたものだった。しばらくすると——しばらくすると、あの子は泣くこともしなくなりました。それなのにこの女は、あの子に家へ帰ってもらいたいだなんて……クリスマスとアップルパイのために」^(註4)

と言って泣き崩れる。

最愛の息子に加えられていた妻の虐待を知り、ヴァレリアンは蒼白になる。シドニーは泣きじゃくる妻を抱えて去り、ショックをうけたジャディーンはサンに抱えられて去る。ヴァレリアンは、幼かった息子が洗面台の下から発していた言葉にならない伝言の意味を今知った。また妻が隠れて酒を飲んでいた事実はなく、素面でわが子を虐待していたことも知る。妻の口から、虐待は「どこか心地よいことだった」と聞き、彼の体は震え始める。彼は、息子の傷のひとつひとつのために自分は血の涙を流し、いくつもの命をもって償わなくてはならないと我が身をさいなむ。シドニーはオンディーンを寝かしつけ、深夜食堂にもどる。彼にとっては、誠になるかどうかの瀬戸際だ。ヴァレリアンはテーブルから動くこともできず、「何も分からん」と言うばかりだ。こうして待望のクリスマスは、カラストロフィーと化して終わる。

ここに至って、白人夫婦の息子をめぐるとの対立の背後には、隠された惨劇があったことが分かる。オンディーンの女主人に対する憎悪にも理由があったのだ。マーガレットが息子の来訪に執着したのは、息子との過去を修復したいがためだったのだろう。マイケルが島に来ようとしない理由も分かった。これまで読者の心に引っかかっていたさまざまな謎は解けた。白人夫婦の日常生活での波紋は、クリスマスの夜に大きなうねりとなって、何もかもをひっくり返した。白人夫婦と使用人夫婦との不協和音も、この

夜に最高潮に達した。こうしてみると、当初から描かれていたさまざまな日常の現象は、このクライマックスへの伏線であったことが分かり、その現象の背後にある本質が今暴露されたのだ。その本質の暴露は登場人物の日常を大きく変えることになる。

クリスマスの翌朝、マーガレットは長いこと秘めてきた罪が暴かれ、むしろさばさばした気持ちで起きる。あまりの苦しさに事実を受け入れることさえできないでいる夫に、小出しに体験を話す。息子を虐待したのはそうしょっちゅうではなかったこと。息子を心から愛していたが、自分を抑制することができなかったこと。息子が告げ口できるようになった頃には虐待を止めたことなどを。オンディーンは女主人の行為を知っていたが、それを止めさせようとしたり、ヴァレリアンに告げ口したりしたら職を失うことになると恐れて、夫にも言わず胸にしまっていたのだ。マーガレットは厚化粧や髪の毛のカールを止める。彼女のボケ症状は消えて健康な女性になる。ジャディーンとサンは、混乱の夜から丸二日間部屋にとじこもり、その間に結ばれ、その後ニューヨークに逃げるように去る。9カ月後、ジャディーンがサンと別れて再び「十字架館」を訪れた時には、マーガレットは夫の服を整理するかいがいしい主婦となっている。そして息子はもう大人なのだから自分に用はないと語り、合衆国にもどることはもう彼女の念願ではなく、夫の世話で忙しいと語る。シドニーとオンディーンは辞めさせられることもなく、再び白人夫婦に仕えている。ヴァレリアンは息子の痛みを知らずにいた自分を責めるあまり、精神を病み健康を害し、ひとりでは何もできなくなる。温室は荒れ放題、食事もシドニーに食べさせてもらっているありさまだ。シドニーと足の「うおのめ」の話をするのは、物語のはじめと同じ日常の風景だが、その内実は大きく変わっている。

ここに至り、白人夫婦の物語は収束に向かい、この小説の終わりも間近となる。

以上に見てきたように、白人夫婦の物語がこの小説全体を貫く大きな流れであり、それがこの小説の骨格になっている。この小論の冒頭に記したように、白人夫婦の物語は単なるジャディーンの背景という以上の意味を持っていると言える。

(2) 白人夫婦の物語を描くモリスンの意図

ではモリスンは白人夫婦の物語を通して何を語りたかったのか。

ヴァレリアンは息子が発したSOSの意味も妻のことも知らうとしなかった自分を悔い、「無知の罪」を自覚する。このヴァレリアンの「無知の罪」に関しては多くの研究者がとりあげている。^(註5)しかしヴァレリアンの罪は、彼が自覚することよりもはるかに広く深いものだったのではないだろうか。まず妻に対しては、美しいだけでよいと必要な知識を得る機会を与えず、孤独のまま放置しその不安を理解せず、使用人との交流を禁止し、育児をまかせっきりにし、良家の主婦のあるべき姿を強いた。使用人夫婦に対しては、長年にわたり低賃金で休日もなく将来の保障もなく働かせてきた。そこには黒人だからという差別意識が感じられる。妻に対しても使用人に対しても、思いやりがなく、自分の意のままに支配してきたのだ。ヴァレリアンに関してシドニーが妻オンディーンに語る言葉はこのあたりの事情を見事に言い当てている。

「あの人が奥さんのこと心配するの見たことがあるか」(中略)

「ない。ないさ。わたらのことだって気かけちゃいない。人が自分のいうなりになりゃ、それで満足なのさ」^(註6)

また、オンディーンは女主人に対する主人の対応をジャディーンに、

「彼は彼女を愚か者のままにしておいた、ぶらぶらさせておいた。そういうことはいつだって危険をはらんでる」^(註7)

と語っているが、これも的確な観察だろう。

家長であり雇い主である自分が、妻や使用人を支配して当然というヴァレリアンの考えが、妻を追いつめ使用人を沈黙させ、妻による息子への虐待を生んだのだ。

ヴァレリアンの傲慢は家の中の者へのそれにとどまらない。島が「十字架館」の建設のため切り開かれた時、島の動物や植物、雲や川がパニックに陥ったと記述されている。ヴァレリアンは島の自然を破壊し、北国の植

物を鑑賞するために温室を建てた。ここには自然を支配しようという傲慢が感じられる。またギデオンとテレーズを名で呼ばず、しかも簡単に誠にした。さらに、民族的対立を鋭く認識しているサンは、ジャディーにこう語っている。ヴァレリアンの生活は根底から黒人の犠牲の上になりたっていて、ヴァレリアンの豊かな老後は、キャンディーの原料である砂糖とココアを産出した南の島の人々の労働を搾取することによってもたらされたものであり、彼こそが泥棒なのだ。このようなことすべてにもかかわらず、ヴァレリアンは自分を慎ましい善人と認識していた。

「無知の罪」以上の罪が彼にはあった。自然の破壊、家長としての支配、資本主義的搾取、人種差別という多くの罪が、ヴァレリアンの人生を形成していたと言える。^(註8)

小説の幕切れ近くでは、ヴァレリアンの支配はあらゆる面でガタがくる。温室では植物が枯れ、蟻の侵入が始まる。礼儀正しかったシドニーは、許可なく主人の前で主人のワインを飲む。ヴァレリアンは「もう島にいる必要はなくなった、合衆国に帰りたい」と言うが、誰もそれを実行に移さない。(使用人夫婦は暖かいこの島が気に入っているのだ。)妻のマーガレットは夫からすっかり精神的に自由になり、上流階級風を止め自然にふるまい、夫の世話に生きがいを見いだす。島の地形を「整備」し郵便制度を改善させてまで島に乗り込んだ男ヴァレリアンは、今では無能な姿をさらしている。

息子マイケルへのヴァレリアンの愛は、彼の最大の弱点であり、息子を妻によって傷つけられたことを知った彼は、身心ともに崩壊し、支配力を失った。ヴァレリアンが生涯で最も愛し大事に思ったのは息子であり、その息子に事業を継がせることこそ彼の生涯の唯一の目的だった。それが果たせなかったのは、ヴァレリアンの理解では、妻の育児のせいで息子がダメにされたからだ。しかしマイケルが実際に「ダメな人間」かどうかは読者には不明だ。マイケルを表現する言葉は、「社会主義者」「詩人」「心のやさしい」「自己犠牲的な」であり、さらに少数民族擁護者、「環境保護関係の弁護士」志望である。このように見ると、マイケルはあらゆる面で父のアンチテーゼとなっていることが分かる。資本主義的支配構造のトップにある父と「社会主義者」の息子、傲慢な自分を善人だと思っている鈍感な父と感受性の鋭いらしい「詩人」の息子、妻に対して高圧的な父と「心やさしい」と母から形容される息子、自分勝手な父と「自己犠牲的な」息子、

人種差別意識を持つ父と少数民族擁護者、島を破壊して屋敷を建てた父と「環境保護関係の弁護士」志望の(小説の終わり間近でパークレーの大学に入ったことが分かる)息子という具合だ。とするとヴァレリアンが人生で最も愛した息子が彼のもとを去ったのは、妻の育児の結果ではなく、息子が父と父の生き方に反発したからだと考えられる。マイケルという存在は、父を否定するために描かれていることが分かる。つまり、ヴァレリアンの罪は、本人の認識をはるかに越えて深く、息子の離反という形でその報復を受けていることになる。彼は妻の虐待を知ったあとで、「なぜだ、なぜあの子はおまえを愛しているのだ？」と妻に執拗に問う。その問いは、なぜ自分は愛されないのかという問いでもあるのだが、ヴァレリアンはその問いの真の答を知ることもなく、身心ともに衰えていく。彼が彼の認識しきれないほどの罪(十字架)を背負って生きていくのが「十字架館」であるのは、いかにも象徴的だ。

他方でマーガレットの罪は明白だが、モリスンはそれを断罪してはいないと思われる。マーガレットの虐待は、ときどき精神状態が不安定になる育児ノイローゼから起きたと判断される。相談相手もなく、知識も経験も皆無の19歳の新米ママにしてみれば、無理からぬことだ。マーガレットが感じていた育児の大変さは、次のように表現されている。

「それに彼女は赤んぼうの要求に憤慨していた。(中略)保護に対する並はずれた子どもの欲求をどれほど憎んだか、(中略)眠っている間にも誰かがそばにいてくれる、目覚めたときにも、誰かがいてくれる、空腹になれば、なぜか食べものが魔法のように与えられるという赤んぼうの確信の犯罪的傲岸さ」^(註9)

しかし同時にマーガレットは息子を自分の命より愛していた。

愛する子を傷つけてしまうという話は、モリスンの他の小説においても重要な位置を占めている。『タール・ベイビー』の次の作品である『ピラヴド』(1987年)の場合、その主人公である女奴隷のセスは自由州に逃亡するが、追っ手が追った時、幼い娘を自分のようなみじめな目に遭わせたくないと思い殺してしまう。また『スーラ』(1973年)では、黒人女性エヴァ(スーラの祖母)が、戦争から帰還して以来麻薬中毒になってしまった息子を焼き殺す。いずれの場合も母は子どもを深く愛し、それゆえに殺して

しまう。また『ソロモンの歌』(1977年)では、母の溺愛がわざわざして感情を抑えることができない人間に育った黒人の娘が、失恋の相手(主人公のミルクマン)を殺そうとし、そのあげくに死んでしまう。

このようにモリスンの小説をたどると、モリスンの言わんとしていることが見えてくる。つまり、親が子を愛し育てることは、子の生を引き受けることであり、それは美しい営みのようだが、さまざまな状況の中で実はとほまもなく深刻な営みだということが読みとれる。モリスンがほとんどすべての小説でくりかえし親と子の問題をテーマとしてとりあげているのは、このことが彼女のメインテーマのひとつだからだろう。はたして人は子を傷つけることなく愛し育てることができるだろうか。おそらくどんな親も、精神的あるいは肉体的に傷つけずに子どもを育てることはできない。病気をさせてしまったり精神的に深く傷つけたりして、そのことを悔い続ける親がどんな世の中でも多いに違いない。モリスンは殺人や虐待というショッキングな物語を通して子育てを困難にする状況(人種差別や家長による家族の支配)を告発するとともに、子を愛すること育てることの持つ意味の大きさを訴え、親と子の問題を追求していると言えよう。

これに関連して、『タール・ベイビー』における語り的手法に目を向けてみよう。

この小説では、幼児虐待という過去の惨事は読者に伏せられたまま物語が展開する。物語の大詰めで全貌が明らかになり、それまでの謎が一気に解ける。ソフォクレスの『オイディプス王』のごとくだ。この語り的手法は『タール・ベイビー』の次の作品『ピラヴド』とも共通のものである。つまり、母による子への暴力が終盤で明らかになり、登場人物も読者もショックを受け、それが物語のクライマックスとなっている。この手法は劇的な効果や謎解きという魅力を小説に与えるが、同時に次のような大事な効果を発揮している。母による子への暴力という暗い話題が、自然の時間の流れの中で提示された場合よりも、読者に受け容れやすいものになっているという効果だ。全貌が明らかになった時には、読者は事件が起きるまでの経緯や理由や背景、登場人物のその後を十分理解している。単なる暗い話題、悪あるいは犯罪として読者の反発を招くことなく理解されるようにと、その語りに工夫が施されていると言える。できれば誰も話題にたくないような事柄を、モリスンはストーリーテラーとしてのテクニックを駆使して、魅力的な小説に仕立てることに成功している。『タール・ベイ

ビー』における幼児虐待事件のこのような配慮に満ちた語り的手法を見る時、モリスンのこの問題の提示への並々ならぬ熱意を私は感じる。以上のことから、親と子の問題がこの小説の重要なテーマであると推論される。

(3) サンとジャディーンの世界

さて、この小説のもうひとつの世界、一般にこの小説のメインテーマとされる若い二人の恋愛に目を向けてみよう。

ジャディーンは2歳で父を、12歳で母を失い、叔父夫婦とヴァレリアンの援助を受け大きくなったが、数年前に夏の休暇で訪れた他は彼らといっしょに住んだことはない。彼女はソルボンヌを卒業し、パリでモデルをしている。白人の熱心な求婚者に囲まれて、学位もじきに取れそうだったのだが、ある日民族の美と誇りを体現したようなアフリカの女性(黄色いドレスの女)に会い、圧倒され、急に自分の生き方に疑問を感じ、考えを整理しようと後援者のいるこの島にやってきた。「十字架館」では彼女は白人夫婦とともに食卓を囲み、叔父の給仕を受ける。彼女は叔父夫婦に感謝してはいるが、彼らの面倒を見なくてはならない時期がすぐにきては困ると思っている。ヴァレリアンのことは尊敬もし、感謝もしている。パリの求婚者から届いた90頭の子あざらしの毛皮でできたコートに気に入っている。

一方、サンはフロリダの黒人の村エローで育った。妻の浮気を知りカッとなって妻を死なせてしまい、村から逃れ、以後8年間船乗りなどをしていく。その間も彼は故郷の父への仕送りを欠かさない。ある日カリブ海で汽船から脱け出して海に入り、潮に流されて偶然にマーガレットとジャディーンに乗った小型の舟に入り込む。サンはヴァレリアンの館でジャディーンを知り、その美しさのとりこになる。しかし彼女を侮辱するような口を利き、彼女を「白人」だと言って怒らせてしまう。けれども、翌日さっぱりとした頭髪とスーツ姿に変身したサンの美貌にジャディーンはとまどい、「眼に大草原をたたえた男」と感じる。

サンはジャディーンを誘って車で海岸に出かける。ジャディーンはサンに惹かれる反面、心を許す気にはなれない。クリスマスの晩餐でマーガレットの秘密を知り、ジャディーンはショックを受ける。サンに抱えられて部屋に戻ったジャディーンは、彼に慰められ二日間をともに部屋ですご

す。その間に二人は結ばれ、二人でニューヨークに逃れることを決意する。

ニューヨークで二人は暮らし始める。サンはてらいのない喜びをもって野性的にジャディーンを抱く。彼女はサンの胸の中で孤児でなくなるのを感じる。サンは彼女を故郷のエローに連れて行く。サンは父や友人との再会に歓喜するが、ジャディーンにとっては退屈な田舎だ。しかも夜の暗闇で黒人の女性たちの幻影が彼女を脅す。黄色いドレスの女や叔母のオンディーン、洗濯女のテレーズ、ジャディーン自身の母、エローの女たちが豊かな胸を見せつけるのだ。ニューヨークに帰って二人はまたいっしょに暮らす。将来のことにに関して意見が対立する。学歴を持ち高給の得られる仕事に就くことを人生の目的と考えるジャディーンと、暮らせるだけの金があればいいと考えるサンは対立する。彼女はサンに大学に入ることを勧めるが、サンはヴァレリアンの援助を受けて学ぶことを拒否する。彼女はニューヨークに住み続けたいが、サンは仕事のありそうな他の町に移りたい。激しい口論のあと、ジャディーンはサンを棄てて島にもどる。

島に帰った彼女は叔母に今は面倒を見ることはできないと言いきり、あざらしの毛皮のコートを持ってパリに飛ぶ。ジャディーンを追ってきたサンは、テレーズの操縦する小舟で島の裏側に着く。ここから「十字架館」に行くには丘陵を越えなくてはならない。テレーズはサンに、「あの娘はあきらめて島の丘陵に住んでいる伝説の騎馬男たちのところに行きな」と言う。その昔アフリカから連れて来られ、ドミカ島を見た瞬間に視力を失った奴隷たちがいたという。その一部が今もこの島に隠れて住み馬に乗って山を駆けると信じられている。その話をサンは以前ギデオンから聞いていた。夜の真っ暗闇の中で、サンは丘に向かって駆け出す。^(註10)

(4) サンとジャディーンの話について

サンとジャディーンの文化的背景の違いとそれによる二人の決裂について、また『タール・ベイビー』というタイトルの意味については多くの研究者が論議を尽くしている。ここでは省く。ただ二人の最後の行動について述べたい。ジャディーンは民族の歴史につきあうことを拒否し、いわば新しい女性の生き方を目指してパリへ向かう。その飛行機の中で彼女はこれからは一人で闘っていかう、黄色いドレスの女と、そして夜来て彼女を脅かす女たちともわたり合おうと決意する。しかし同時に彼女はサン

を忘れることは苦しいだろうと感じている。彼女は白人の社会でやっていくには、すばらしく魅力的だが白人ほどは聡明でない自分をアピールすることがつねづね大事だと感じていた。彼女はパリにもどり、再びそんな自分を演じて白人社会の中でキャリアを築いていくのだろうか。そもそも彼女が島に来たのは、自分の生き方に疑問を感じたからだが、その問題は解決したのだろうか。

サンはジャディーンの去ったあと、ニューヨークのアパートで彼女の写したエローの人々の写真を見、共同体に抱いていた過度の思い入れから目が覚めるが、民族の歴史と誇りを棄てることは彼にはできないだろう。モリスンの前作の『ソロモンの歌』には、主人公のミルクマンが黒人としてのアイデンティティを獲得し、民話の世界に自ら羽ばたいていく感動的なラストシーンがある。他方『タール・ベイビー』では、サンは自分の意志からではなくテレーズの策略によって民話の世界に迷い込んでいく。これは民族のアイデンティティを持ちつつ現代を生きていくことの困難さを感じさせる結末だ。サンの問題も未解決なのだ。

サンとジャディーンの本格的な葛藤は二人がニューヨークに行ってから始まるが、その叙述は小説の終盤に押しやられて、会話中心でなく、ナレーション中心で手早く語られている。二人の人生の問題も葛藤も未解決のまま終わっている。このような書き方からみても、この若い二人の物語がこの小説の唯一の主題とは言えないだろう。

そのことをさらに根拠づけるものとして、二人の子ども時代がほとんど書かれていないことを指摘したい。さきに見たように白人夫婦の子ども時代は語られていた。

それに対して、ジャディーンの子どもの時代については、ごく短く触れられているだけだ。黒人の少女が白人の文化を自らのものとして受け入れていく過程では、さまざまなことがあっただろうと想像されるが、その点については書かれていない。親代わりの叔父夫婦や後援者のヴァレリアンとの内面的なつながりも希薄であり、過去に彼らと具体的などのような出来事があったかは書かれていない。サンについても同様で、子どものころの彼についてはほとんど触れられていない。帰郷した時の感激した様子や迎える父や仲間の歓迎ぶりから、彼が子ども時代を故郷の黒人の共同体に深くつまれて過ごしたことは想像される。そのことが彼の黒人としての誇りとアイデンティティをはぐくんだであろうことも想像される。しかし想

像されるだけであり、具体的な生い立ちについては描かれていない。このことがサンの人物像を類型的なものにしている。民族の誇りを持ち、民族を支配した白人をあくまで許さず、大学教育も会社勤めも白人の法も都会をも拒否するサンは、まさに典型的な「民族の息子(サン)」だ。

ジャディーンとサンの背景が十分書き込まれていないためもあるが、二人の間の恋愛物語は類型的な物語になっている。美しく魅力的な若い女性と、同じく美しく魅力的な男性がお互いの美しさに惹かれて愛し合うが、生き方の違いから決裂するという、いわばありきたりの恋愛物語となっている。

最後に

これまで見たように『タール・ベイビー』は主に白人夫婦の物語と若い男女の恋愛物語から成り立っているのだが、ではこの二つの物語はどのような連関にあるのだろうか。

この連関を藤平育子氏は、「養う」という言葉をキーワードにして次のように解き明かしている。マーガレットの幼児虐待は「養う」ことの放棄であり、養うことを放棄された子は孤児となる。ジャディーンは文字通りの孤児であり、文化的にも孤児である。叔父たちを「養う」ことを拒否し、自分自身だけを拠り所に彼女は旅立つ、^(註11) というのである。この藤平氏の見解は次の推論に私たちを導く。「養う」ことは直接的には家族の養育・扶養を意味するが、年長の者を敬い世話をするという意味では、民族とその文化の維持・継承の意味合いを持つだろう。つまり家族の問題は、民族の問題に拡張され得る。家庭内の「養い」(白人夫婦の問題点)と、民族の継承(サンとジャディーンの前立点)は無関係でないことを、藤平氏は「養う」という言葉を用いて私たちに教えている。

また Jill Matus 氏は、その著書において『タール・ベイビー』に言及し、「家父長制を批判するフェミニスト運動が盛んな時代にあって、黒人女性が母の世代から何を受け継ぐべきが問題とされている」^(註12) と述べているが、おそらくこれが最も的確な指摘であるだろう。

『タール・ベイビー』の時代設定は1979年から80年ころ、モリスンがこれを書いたのは1981年。従来の家父長制が批判され、家庭や伝統の枠を越えた新しい女性の生き方が追求される時代、また核家族優勢の時代に

あって、なお母であること、親であること、民族の一員であること、そして同時に自分自身であることをモリスンは追求しているのだろう。そのひとつの成果が『タール・ベイビー』という形で私たちの前に提示されている。現代に生きる私たちにとって示唆の多い小説であるゆえんであろう。

注

- (注1) 大社淑子氏は『トニ・モリスン 創造と解放の文学』（平凡社、1996年、140頁）で、作者へのインタビューをふまえ、「これは作者も言う通り、恋愛小説である」と述べている。また、加藤恒彦氏は『アメリカ黒人女性作家論』（御茶ノ水書房、1991年、90頁）で『タール・ベイビー』について次のように述べている。「そうしたなかで最も重要なのがジャディーンとサンの関係と両者の生き方や価値観の違いをめぐる対立・葛藤であるといえよう。それ以外の対立はそれ自身としての意味をもちながらも、同時に、ふたりがそれぞれに住む世界の広がりや背景を提供している。」
- (注2) Toni Morrison, *Tar Baby*, Penguin Group, 1982, p. 75. 藤本和子訳『タール・ベイビー』早川書房、1995年、77頁。
- (注3) *ibid.*, p. 207. 訳書208頁。
- (注4) *ibid.*, p. 209. 訳書209～210頁。
- (注5) 例えば、大社淑子、前掲書、154～156頁など。
- (注6) *ibid.*, p. 163. 訳書164頁。
- (注7) *ibid.*, p. 279. 訳書279頁。
- (注8) ここでモリスンは白人夫婦のあり方を、サンの故郷エローのあたたかい黒人共同体と対比させて書いていると見ることもできる。しかし白人の家長だけが支配的になるというわけではない。『ソロモンの歌』（1977年）では主人公の父（金持ちな黒人）が支配的なやり方で家族を自分の意のままにし、そのために妻や子がさまざまな苦しみや問題に直面する様子が描かれている。
- (注9) *ibid.*, p. 236. 訳書237頁。
- (注10) テレーズはモリスンの小説にしばしば登場する「民族の母」のイメージを持つ女性だ。彼女は老年になっても乳が出る乳房と、超人的な知覚能力を持ち、白人を憎んでいる。彼女は誰より早く、飢えた人間（サン）が屋敷に潜んでいることに気づいていた。彼女は合衆国で行われている妊娠中絶のことを「アメリカの女は爪で胎児を殺す」と理解しているため、ギテオンから馬鹿扱いされるが、彼女の理解は、無知からくる曲解というより、物事の本質を象徴的にとらえたものと言える。彼女はサンをはじめから「騎馬男」の一人だと思っていた。「民族の息子」としての

サンの本質を見抜いていたことになる。

(注11) 藤平育子『カーニバル色のパッチワーク・キルト——トニ・モリスンの文学』學藝書林, 1996年, 152~158頁。

(注12) Jill Matus, *Toni Morrison*, Manchester University Press, 1998, p. 92

On the Theme of Toni Morrison's *Tar Baby*

Mariko Ohta

Tar Baby is said to be the love story between a beautiful black woman, molded by white culture, and a black man with a strong loyalty to his black community. But in this novel Morrison devoted more pages to describing a white millionaire and his wife who support the black woman. Why did Morrison describe the white couple's history so precisely? Is the couple only the background to the black woman? In this paper I try to answer these questions and examine the theme of *Tar Baby*.
